

一年を通じて観察するのに最も変化を捉えやすいのが秋だと思っていた。今まで緑だった葉が黄や赤になる。でも、そのように色変するのは秋だけでないことがわかった。葉の形からイタヤカエデと思つて秋にはオレンジがかった黄色になるのを期待していたら、五月に緑の葉が赤くなり始めた。凶鑑で調べ直すとイタヤカエデの仲間のベニイタヤというのが春に若葉が赤くなるとあつた。花にも色変がある。最初は淡い色だがそれがだんだん濃くなつたり、その逆で濃いのが薄くなるというのは良くある。ところがズミという木の花は劇的な色変をする。春に蕾が膨らんで来ると鮮やかな赤色が目を引く。そして満開近くになると純白になるのだ。最初は違う種類の木かと思つたぐらいの変化を見せる。

花といえば、春になるとご近所ではソメイヨシノやエゾヤマザクラが満開になる。コブシの白も良く目を引く。でも、うちにはそのように目を楽しませる花が見当たらない。まあ、ご近所との間には特に塀などもなく良く見えるのでお花見には事欠かないのだが。樹木調べをしているうちに一輪だけ花をつけるコブシを見つけた。葉の形からしてコブシと思われる木も数本あつたが花は確認できなかった。木が密集して生えているところにあるので花をつけるには条件が悪いのかもしれない。サクラは葉が出る前に咲くと思ひ込んでいたが、ミヤマザクラはそうではなかつた。葉が茂つたあと、それもサクラの季節をすっかりすぎたあたりで、白い清楚な花を咲かせる。この木も敷地の奥に生えていたのでそれまで見落としていた。そのほかにも見落としていた花はいろいろあつた。シナノキもそのひとつだ。他の木に埋もれがちに生えていたのだが、ハート型の特徴のある葉だつたのでシナノキとわかつた。何度かその木の前を通るうちに茂つた葉の間から長めの軸が伸びその先が分かれて丸いものが見えているのを見つけた。しばらく観察し続けているとそれが蕾でやがて白い花が咲き始めた。遠目にはあまり目立たないが、近づいて観ると下向きに細い白い花弁が開いた姿は、ちょうど線香花火のようで可憐であつた。

秋の紅葉の季節は確かに風景が変わる。特に、ヤマモミジの紅色を太陽の光を透かして見るときは格別である。ただ、一年を通して見ると冬を前に全ての葉が落ちた後もすてがたい。樹種を特定するのに葉の形を観察していたので落ち葉からそこに生えている木を思い出すことができる。ここにミズナラの大木があつたこと、ここにシラカバが数本あつたこと、もちろんヤマモミジやイタヤカエデも半年のいろいろな変化を楽しませてくれたことと一緒に思い起こさせてくれる。

ややもすると植物のある瞬間を取り出し、それがその植物の姿と思ひ込みがちであつたが、そんな単純なものではなく日々刻々と変化を繰り返し、また、成長していく姿があり、その時間に寄り添うことができたのは得難い体験だつた。これも、色々苦労して敷地内の樹木を隅々まで調べたことで内在化という大げさだが、植物たちとの距離が縮まったおかげかと思う。

